

五感の学校プロジェクト特別講義

「都市センターと市民交流プログラム/マンチェスターURBISの事例」

2008年7月31日(木) 17:00-

マーク・レイニー Mark Rainey (URBIS ビジタープログラムマネージャー)

日高仁 (UDCKディレクター、東京大学新領域創成科学研究科特任助教)

ナビゲーター：紫牟田伸子 (日本デザインセンタープロデュース室チーフ・プロデューサー)

通訳：溝口彰子

都市の大衆文化を展覧会やさまざまなワークショップを通じて紹介するエキシビションセンターURBIS (イギリス・マンチェスター) のビジタープログラムマネージャー、マーク・レイニー氏を迎えてのトーク。冒頭は本人によりURBISの概要やこれまでの活動をご紹介いただき、後半は同じくまちの拠点として活動を続けるUDCKのディレクター日高氏より施設の説明、URBISとの比較を検証。終わりにナビゲーター含む3者トークでまちにおける活動拠点の意義について話し合った。

■URBIS概要 (レイニー氏プレゼンテーションより)

設立と再開発：

- 産業革命期に栄えたマンチェスターは、第2次世界大戦後、不況が続いていたため、市議会が立ち上がって都市再生のための様々な試みが行われた。
- 1980年代のミュージックシーンの中心となったナイトクラブがあったことで、都市に新しい文化的な風紀を巻き起こした。
- 決定的だったのが、1996年の爆弾テロ。街並に甚大な被害を被り、その部分を再開発する必然性が生まれた。

建築と運営：

- 国際的なコンペティションで採用されたマスタープランは、街の中心部をひらけたものにするというもの。
- URBISもこのビジョンに関連して設立され、大胆かつモダンな建築だが、周辺の古い歴史的な建築物を引き立てている。
- 先例もマニュアルもないままの運営だったため、オープンから今日まで、入場料の廃止や常設展示の完全撤去など、抜本的な改革を行ってきた。基本は市議会のファンドによって成り立つ。

URBISの独創的なプログラム：

- 展覧会では、グローバルな影響力を持っているマンガ、都市におけるガーデニング、ホームレスとのコラボレーションによる写真展など、独自の視点による企画展を開催している。
- 外のコミュニティに向けての活動として、市内のツアープログラムがある。他と違うのは、それぞれのガイドが個人的な思い入れでツアーを組み立てること。
- 教育プログラムのうち代表的なリクレイム・プロジェクト (更生プロジェクト) では、マンチェスターの犯罪多発地域に住んでいるティーンエイジャーたちにポジティブな目的意識を身につけると同時に、実現の可能性のある目標を持ってもらうための様々な活動を行った。

■UDCKの活動 (日高氏プレゼンテーションより)

- 行政と大学と民間の共同で、街を作るための計画や提言をしている。それに関連しての展示、大学の公開授業を行っているが、学生たちが自由な発想で考え、発表することができる。
- オフィスでは報告書の作成、そしてこの街の将来像のスタディを行っている。

- 広い土地や仮設のユニットを使っでの提案、実証実験が可能で、例えば「小さな公共空間実験施設」では、大きなプロジェクトを行う前に、小さいスケールで実験を行うことができる。
- これらの活動は受け入れ可能な場所と公共団体があって、研究機関がアイデアを出すという環境だからこそできる。

コミュニティーワーク：

- 地元の住民を対象にしたまちづくりスクール、子どものワークショップを開催。
- 交流という飲み会など住民が気軽に参加できるイベントを開催し、そこでもプロジェクトの発表を行って、より多くの方がセンターの活動に参加してもらえるよう呼びかけている。

■三者トークと質疑応答

紫牟田一

UDCKは街を作っていこうという段階ですが、URBISは街を知り、もっと街を自分たちで変えていこうというところがあると思います。街を知ることの大切さって、どのようなところにあると思いますか？

マーク一

街を知るといことは、URBISのような施設にとって根本的に重要なことです。URBISで成功しているプログラムというのは、周りのコミュニティーや歴史を知っているからこそできることで、それで多くの人々をURBISに引き込むことができるのです。施設ができていだけでは、全く機能し得ないのです。

日高一

去年我々がURBISに行ったとき、ちょうど常設展示をなくして企画展示室にする改装の最中でした。街を知るといことは、何か博物館等に行って見てわかるものではない。今活動している都市を伝え、一緒に考えていくものだというのが、彼らは実際に活動した中で見つけてきたのだと思います。

でも、殆ど我々は街のことを知らないと思った方がいいと思います。もう少し街について、日常的にみんなと話をする、自分の個人の感覚で街について考えることが、街を知ることだと思います。そういう習慣が我々にはないなと私は思います。

紫牟田一

街の情報というのは、私達の場合は消費情報に入ってしまうんですね。そうではない考え方というのは確かに日高さんがおっしゃるようによく少ないと思います。せっかくなので、皆さんから質問などがあれば、何でも言って頂けたらなと思います。

質問者A一

このような活動をオーガナイズする人たちはどのような経緯で、どのような人が集まっているのですか？

マーク一

まず、ごく最近、URBISの運営や方向性をみている地域エグゼクティブが任命されました。クリエイティブチームではアートやポピュラーカルチャー、歴史の展示会をキュレーションし運営しています。教育プログラム部門で働いている人は元教師という人が多いです。そしてオペレーションセクションでは、すべてのオペレーションに関わる人たちをみえています。そしてURBISは人材開発がとても前向きで、内部でどんどん人材を開発して育てていくという点が非常にいいところだと思います。

質問者A—

大学や企業の関わり、資金面などのサポートはあるのでしょうか。

マーク—

マンチェスターにも4つの大学があり、大学との連携も大切になっています。毎年卒業制作展の開催や、最近アーバンリサーチフォーラムというのを大学と組んで始めています。

企業との関連性ということですが、URBISは入場料をとらないので、企業のスポンサーを得るということは非常に重要なのですが、URBISは公的な施設ですから、難しいところもあります。

質問者B—

地域の住民は、どれくらいURBISの運営や企画にかかわっているのか教えてください。

マーク—

まず、スタッフの採用に関して、採用の場合の応募者の資格にマンチェスターの街を知っていることが条件になっています。

また、地域の人たちとのかかわりですが、公園にたむろしている若者たちを意識したプログラムもやっていますが、ただそこにいただけという場合もあって、巻き込むのも難しいということがあります。

そしてリクレイム・プロジェクトは、URBIS側からのアプローチで行われたのですが、実際始めてみると、彼らや、いろいろな人たちからも具合的なフィードバックをもらい、現在その中で進行中です。

紫牟田—

運営している人もそこに住むというのは重要なことですよ。

マーク—

その通りで、URBISで働く人自身がマンチェスターに住んでいるということは非常に重要なことだと思います。質問と関連して、街の中心にある施設として、いろいろなプロジェクトをやっていくときに、勝手な思い込みで行うのではなく、市や住民の人達から具体的なフィードバックをもらって、そのやり取りの中でやっていかないと、絶対うまくいかない。これはひとつ言えることだと思います。

質問者C—

マンチェスターの中では、人々はどのようにURBISのことを位置づけていて、どういう活用をしていますか。

マーク—

当初、立派な建物をつくっても、中になにがあるかわからないものを市議会が大枚をはたいて作った、というネガティブなイメージがありました。それを払拭するために方向転換をしてから、様々なコミュニティーのニーズを反映しての企画を沢山行ってきたので、より多くの人がこのビルの中に入って、何らかのイベントに参加したりして関わりをもつ人が増えてきました。

質問者A—

いろいろな切り口で都市の問題にアプローチしていると思ったのですが、そこを基点に交流が生まれたり、企画を派生させたりすることは考えていますか。

マーク—

入場者の方々にアンケートみたいなものを書いてもらい、それで小規模な展覧会を行うことがあります。例えば、アシエンダ・ナイトクラブの展覧会を開催したときも、フィードバックから人々にとって非常に重要な位置を占めているのかがわかってきましたので、新たな展覧会を企画しました。マンガに関する展覧会もリクエストがたくさんあって、URBISらしいユニークなアプローチをしようということをも自分たちで考えました。60年代のミュージックシーンを巡るツアーでは、この人気を受けてパーティーをやろうという企画がありました。人気のある企画をなぜ人気があるか展開させていくということで、かなりフィードバックを参考にしていると言えます。

紫牟田一

日本の場合、通り魔事件の多発みたいに、街が凄く危ないという認識になったりしているのではないかと思います。通常の今までの社会に吸収されにくい部分もあるのかなと思いました。日本でも社会問題を扱えといっている訳ではないのですが、何か気軽に来られる街の拠点のようなものの新しい形も考えられたらいいですね。

日高一

日本はあまりそういう問題には閉鎖的な印象があります。ただ、安全性という意味で言うと、街の安全性はまだまだ高いと思いますし、きれいだと思うので、悲観的な感じがしないですね。ただ、不満なのは合意がとりにくいことです。例えば、私がバルセロナで仕事していたときに思ったのが、彼らはハッピーなところは同意をとりやすい。都市計画をするときにも街ぐるみで盛り上がるんです。日本はそういう動きが全然なくて寂しいと思います。私は最終的に残せるものは街の良さなんじゃないかと思っています。

紫牟田一

私が特にイギリスは面白いと思うのが、ワークショッププログラムがとても面白い。例えばテートギャラリーは子どもたちに考えさせたりすることがすごく上手で、プログラムが優れていると思います。URBISも考えさせる、一緒に考えてみる、時間をかけてでもやろう、というところがとても上手だと思いました。最後にマークさんから、一言頂いて、今日はこれで終わりにしたいと思います。何か日本に来た感想やメッセージなどありましたら、どうぞ。

マーク一

今日みなさんとこういう話をさせていただいて、自分自身もすごく学ぶことができ、日本に来て本当に良かったと思います。UDCKのこともお話を伺って、大学と地域とデベロッパーという三者が合同で何かをしようとしているところがとてもポジティブだと思いました。

日高一

今後もURBISの活動には注目していきたいと思います。UDCKもこの建物自体は仮設なので、この先のことを考えているところですが、今後この街をずっと見ることができる場所として作りたいというのが全員の思いです。こういう場所が今後どうなっていくかということはURBIS同様よくわかりませんが、今後とも是非よろしく願います。

紫牟田一

柏の葉キャンパスでもいろいろな活動をされている方がいらっしゃいますので、素敵な柏の葉になるといいなと思います。今日は本当にどうもありがとうございました。